



Newsletter

映像メディア英語教育学会 九州支部

The Association for Teaching
English through Multimedia (ATEM)
Kyushu Chapter



第19号

2023年(令和5)年2月1日

映像メディア英語教育学会 九州支部事務局 発行

〒890-8565 鹿児島県 鹿児島市 高麗町6-9

鹿児島女子短期大学 石田 もとな 研究室

TEL. 099-254-9191(代)

Email:k_office@atem.org

URL: http://atem.org/kyushu/

編集: 福田 浩子

Contents

巻頭言 Page1 支部大会報告 Page1-2 国際大会報告 Page 3

ATEM 九州支部 2023

ATEM 九州支部会員の皆様

本号では、2022年度の支部大会報告、全国大会の報告のほか、後半では支部運営メンバー有志による映画の寸評が掲載されています。ぜひ楽しくご覧いただけますと幸いです。

さて、24回目となる2022年度の支部大会は、前年度同様 Zoom でのオンライン開催となりました。ご発表は、南は沖縄から北は北海道まで。オンラインの利が生かされた、日本を縦断する大会となりました。また、特に今大会を象徴するのは、ベテランから若手まで、幅広い世代、多様な立場の方々の活躍が目立った点だといえます。北海道からの刺客(?)としてご発表くださったチーム北海道支部(西氏、千坂氏、平川氏)の皆さんには生涯学習者としての「学ぶ側」の視点を示していただきました。一方、若手の大学院生によるご発表が2組(神谷氏&石橋氏、中山氏)あり、若手教育者として、あるいは教育者を育成する観点からご発表をいただきました。いずれも緊張感と気迫のこもった内容で、大会にも私個人にも大変いい刺激をもたらしていただきました。

大会のあとには、初の試みとして「オンライン親睦会」を行いました。会員同士の交流が難しいオンライン大会ですが、近況や発表についてひとことずつコメントをシェアすることで、ほっとできる楽しい時間となりました。

回数を重ねずいぶん慣れてきたオンライン大会ではありますが、顔を合わせて直接意見交換したり、交流したりできるのが本来の学会の醍醐味。2023年こそ対面での開催を実現したいですね。

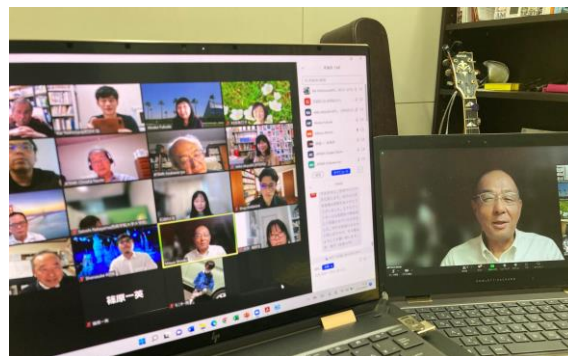
吉村 圭 (支部長)

第24回 支部大会報告

第24回大会はコロナ禍での開催のため昨年に引き続き Zoom でのオンライン形式で開催しました。

■日 時: 2022年8月27日(土) 13:00~17:00

■実施方法: Zoom



< 発表プログラム >

◆研究発表

Session 1

スポーツ映画を通して考えるインターセクショナリティ

秋好 礼子 (福岡大学)



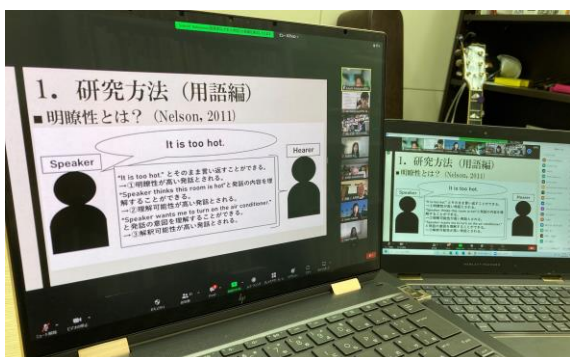
2021年に東京オリンピック開催されたこともあり、人種、移民、ジェンダー、階級などの問題が重要な要素になっているスポーツ映画に焦点をあて ①*The Blind Side* ②*42*、③*King Richard* の3本の映画を用いて、「インターセクショナルティ」という概念に学生の意識を向けさせる方法について考察を行った。

Session 2

映像メディアを用いた発音指導法—明瞭性の研究結果に基づいて—

中山 聡

(西南学院大学大学院文学研究科英語学専攻)



中学生への英語の発音指導を行う場で使用できる映像メディアについての紹介と、英語発話の明瞭性を妨げる要因についての分類と考察を行い、今後の音声学的研究についても言及した。

Session 3

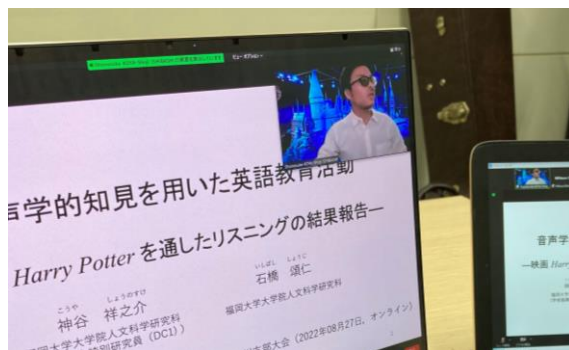
音声学的知見を用いた英語教育活動—映画 *Harry Potter* を通したリスニングの結果報告—

神谷 祥之介

石橋 頌仁

(福岡大学大学院人文科学研究科博士課程後期)

映画 *Harry Potter and philosopher's stone* を用いた大学1、2年生向けのリスニングの講義の実践方法の紹介と、実践前後での学生のリスニング能力や学習充実度の変化について報告を行った。



Session 4

動画の物音の魅力—CC を基に—

兼本 円 (琉球大学)



アメリカ映画 *Batman* を元に創作されたテレビシリーズ *Gotham* をデータとして用い、動画の中の「物音」を収集分析し、そのものが持つ魅力と時代の変遷にともなって1) テクノロジーの変化に伴って消滅、消滅しかけるもの 2) 変化せずそのまま残るもの 3) 古いものにかわるもの について言及した。

Session 5 (支部交流発表・北海道支部)

We find joy in learning: from the views of lifelong English learners

NISHI Yoshikazu

HIRAKAWA Ryo

CHISAKA Naoto

(Graduate of Otaru Business School)



北海道支部の3名の先生方による英語学習者としての映像メディアを用いた学習方法が紹介された。

- ・毎日のBBC Top News を要約して自分の意見を交え Twitter に投稿
 - ・Online メディアを用いてのリスニングとリーディング
 - ・音楽を用いた英語学習 (Beatles の楽曲の紹介)
- それぞれの個性に合わせた英語学習法を提示いただき、Internet やDVD がない時代から英語学習を続けてこられた大変さと現在の豊富なメディアについての対比がなされ、現在の学習者が豊富な学習教材を容易にまた安価に入手できるかということを再認識されられた。

◆シンポジウム

映像メディアにみる多様性への配慮

石田 もとな (鹿児島女子短期大学)
吉村 圭 (九州女子大学)



今回のシンポジウムでは「多様性の配慮」を主

題として2名のシンポジストにより、時代の変遷と言葉や表現の多様性の変化について考察が行われた。

石田は様々な「パブリックアドレス」における「表現の変化」に関する考察を、SDGs の実現とLGBTQ 配慮がもとめられる中で、それまで丁寧な表現・マナーとして使われてきた言葉が「ジェンダー平等」の実現や社会が変わることによって「ポリティカルコレクトネス」の変化によって、どのように変遷を遂げていくかを映像メディアを通して行った。

吉村はA. A. Milne が著した *Winne-the-Pooh* 及びディズニーによるアダプテーション作品群から「よそもの」の描かれ方に焦点をあて考察を行った。

オンライン親睦会

今回は支部大会終了後に〈オンライン親睦会〉を開催し、懇親会参加者にはまず自己紹介をいただき、和やかな雰囲気の中で近況や発表へのコメントの交換、今後の抱負などを語りあう場となりました。



今回もコロナ禍ということで第22回、第23回に引き続き3度目のZoom開催となりました。オンライン開催の利点である「どこからでもいつでも参加できます！」がうまく活用され、北は北海道支部の先生方、南は沖縄の先生による演題発表をいただきました。時と場所の制約がないため開催地から遠い先生方の参加が以前より容易になったのはオンライン開催のおかげだと思います。また、大学院生の方々からの研究発表や、初の試みであるオンライン懇親会もあり、今までとはひと味違う大変有意義な支部大会となりました。

支部大会および懇親会にご参加いただきました皆様方には感謝を申し上げます。

第 27 回全国大会報告

2022 年 11 月 5 日 (土)・6 日 (日) に、第 27 回全国大会がオンラインで開催されました。引き続き、対面での開催は叶いませんでしたが、2 日間の開催で一層多くの研究発表があり、多くの方がご参加くださいました。



開会式の様子

[日時]: 2022 年 11 月 5 日 (土) ~6 日 (日)

[会場]: オンライン (Online)

[大会テーマ]: 「気づき」を通してコミュニケーション力を高める

Theme: Improving Communication Skills through Multimedia: Focusing on “Perception”

第 27 回映像メディア英語教育学会全国大会 The 27th ATEM National Convention



大会テーマ: 「気づき」を通してコミュニケーション力を高める

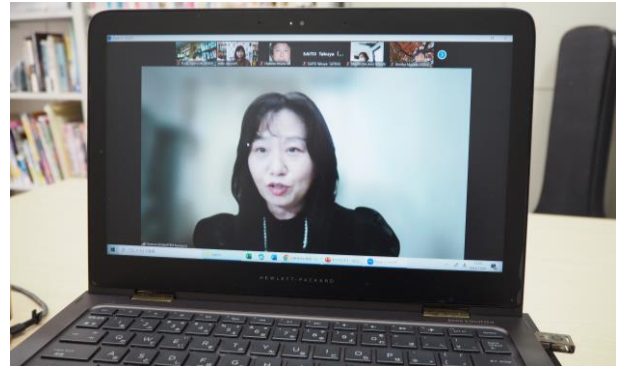
Theme: Improving Communication Skills through Multimedia: Focusing on “Perception”

[日時 Date]: 2022 年 11 月 5 日 (土) ~6 日 (日) (November 5th - 6th, 2022)

[会場 Place]: オンライン (Online)



九州支部発案の SIG シンポジウムでは、「映像メディアにみるポリティカルコレクトネス」というタイトルで、石田もとな先生、秋好礼子先生の 2 名で、動画や映画を使って、主にジェンダーに関する問題をどう学生に考えさせるかということについて発表しました。

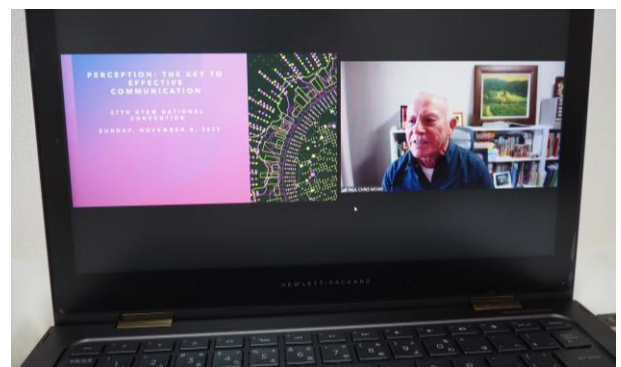


「社会の変化に伴う表現の変化 ポリティカルコレクトネスの行方」 石田 もとな先生 (鹿児島女子短期大学)



「Westside Story (2021) に反映された今のアメリカ」 秋好 礼子先生 (福岡大学)

特別ワークショップでは、元麗澤大学教授 MACVAY Paul Chris 先生が、英語学習に対する学生の意欲をいかに高めるかについて、ユーモアを交えてお話しくださいました。



Macvay 先生による特別ワークショップの様子 (文責・写真提供 秋好)

Stay Home !

映画鑑賞のススメ Special!

コロナ禍も少しずつ落ちついてきているこの頃ですが、Stay Home の方もまだまだ多いのではないかと思います。そこで今年度はスペシャルバージョンとして、いつもより多くのお勧め映画を紹介します。

九州支部のみんなが皆様に今年見た映画（新旧とわず）良かった映画をオススメする企画としました！！コメディ、ファンタジー、ロード・ムービー、娯楽大作、歴史大作、そして差別や障害を取り上げた作品など、九州支部の多様性を垣間見られる内容となっています。

◆◆ 僕らのミライへ逆回転 (原題 Be Kind Rewind)

2008年 ◆◆

『スクール・オブ・ロック』以来、ジャック・ブラック（以下JB）の型破りな演技に魅了され、彼が出ている作品はついつい手に取ってしまう。彼の出ている映画は「いいJB作品」と「悪いJB作品」に分類できて、例えば『ホリデイ』のようにJBのハチャメチャな演技が上品なスパイスとなっている例もあれば、『ナチョ・リブレ』のようにただの悪ふざけに終始している例もある（それも好きだけど）。

『僕らのミライへ逆回転』はまさに後者に当たる作品。発電所襲撃を企てた結果感電し、強力な磁気を帯びた身体となったジェリー（JB）。その状態で友人マイクの働くレンタルビデオ店に行ったため、店のすべてのビデオが、彼の磁気によってダメになってしまう。困ったふたりは、苦し紛れに『ゴーストバスターズ』や『ラッシュアワー』といったハリウッド映画を自分たちで撮影し、レンタルを開始するのだが、次第にその自主製作版が評判になってゆく…。

発電所での感電シーン、自主製作映画の撮影風景等々、終始「JBの悪い癖が出てるぞ」という仕上がり。ただし、この映画の興味深いのは、そんな悪ふざ

けのままどり着いたラストシーンで、測らずしも感動させられてしまう点にある。ネタバレ防止のために詳しくは書かないが、恐らくこの映画のラストに『ニューシネマ・パラダイス』が重なって見える人も多いはずだ。ぜひみなさんの感想が聞きたいので、ここに紹介する。（吉村 圭）

◆◆ デザートフラワー (原題 Desert Flower)

2009年 ◆◆

実在するソマリア出身のモデル、ワリス・ディリーの自伝を元に作成された映画です。13歳の時、60歳の男性との結婚を強要されたことを機に家族のもとを離れた少女が、ホームレスからスーパーモデルへのし上がるシンデレラストoryでもありますが、それ以外にFGMに関することが取り上げられており、現実の厳しさも知ることができます。ソマリアでは古くからの慣習として女性器切除（female genital mutilation、以下FGM）が行われており、ワリスもその経験者の一人として、FGM廃絶のための特別大使に任命され、それ以降、世界中を駆け回って女性の人権問題を提起し続けています。FGMに関しては、出血多量による死、衛生状態が悪い中での実施による感染症、月経困難、心理的後遺症などの害があるにも関わらず、受け継がれてきた伝統であり、その通過儀礼を無視してはコミュニティーに入っていけない、結婚ができないという理由で続けられてきました。女性の心と体を深く傷つけるものでありながら、これを批判することがエスノセントリズムのように扱われることに怒りを覚えることもありましたが、経験者自らが語ることには、その批判は当てはまらないと思います。因習にとらわれることの無意味さを知るためにも、ぜひご覧ください。（石田 もとな）

◆◆ 英国王のスピーチ (原題: The King's Speech)

2010年 ◆◆

エリザベス女王が今年9月に亡くなり、改めて女王の生涯を知る機会が増えた。その一つとして、彼女の父親、ジョージ6世のことがある。幼少の頃から吃音に悩んでいたが、父ジョージ5世の死去により、王位を引き継ぐ運命となる。王子時代に、妻のすすめで、スピーチセラピストのライオネルの治療を受ける。風変りな治療に懐疑的だった王子は、彼の情熱を受け入れ、症状も改善していく。王子は自分のいうことを聞く人ばかりの世界に生きてきたが、そうではない人間に出会い、戸惑いながらも受け入れていき、友情を築いていくという変容を遂げる。このあたりが映画の最初の見せ場となる。

王室が認めない女性との愛を貫き、王位を捨てた兄の後を受け、王位など考えてもいなかったジョージに継承される。予想もしなかった国への責務と演説という重圧に王は苦しむ。

第二次世界大戦でイギリスが対独宣戦布告をし、戦時体制となる。ナチスの猛攻という緊迫した情勢下、国民を鼓舞するための緊急ラジオ演説に王は臨む。緊張感の中、吃音という障害を乗り越え、自信に満ちた演説をし、国民からの敬愛を受ける国王へと大きく変貌を遂げるのが最大の見どころとなる。(林 裕二)

◆◆ ワンダー 君は太陽 (原題 Wonder)

2017年 ◆◆

最初にお詫びしなくてはならない、この寸評が今回の趣旨に合っていないことを。これからご紹介する映画は、まず、2017年公開で、「最近見た」のではない。次に、映画として特別「面白かった」というわけではない。それでもなお今回取り上げようと思ったのは、原作小説をお勧めしたいからだ。R. J. Palacio が書いた Wonder(2012)は児童小説で、生まれつき「普通」ではない顔で生まれたオギーが、「普通って何？」と自問自答する所から話は始まる。その顔を人前ではヘルメットで隠して生活している彼が、両親のすすめで初めて学校に通うことから、彼自身も周囲も変わっていくというストーリーだ。本人だけでなく、友人や姉など子どもたちの率直な語りで話が展開し、各人物の顔の挿絵があるものの、一部しか描かれていないのが特徴的な作品である。そういった特徴のため、映像化は難

しいと思っていたが、案の定、原作を読んだ時の感動アゲインとはいかなかった。しかし、映画をきっかけに本を手にとってもらいたい。作品の結末に出来すぎの感があるのは否めないが、いつもユーモアを忘れないオギーに惚れ、一気読み間違いなしである。そして、「普通」なんてものの存在がどうでもよくなるだろう。

(秋好 礼子)

◆◆ ザ・ピーナッツバターファルコン

(原題: The Peanut Butter Falcon) 2020年 ◆◆

異色のロード・ムービーである。このジャンルには、『イージー・ライダー』を始めとして多くの名作があるが、ダウン症を抱えるザック・ゴツァーゲンを起用した事で『チョコレートドーナツ』同様の深みが加わった。ザックは夢を叶えるために養護施設から脱走、漁場荒らしで命を狙われているタイラーと出会う。兄を事故で死なせ自暴自棄、乱暴者もののタイラーに同行するのは、ザックがタイラーの本質を「良い人」と見極めているからだ。タイラーもまたザックを障害のある可哀想な人として扱うことはない。旅が進むにつれ保護され管理されてきたザックに変化が起きる。そしてタイラーはもちろん、憧れのプロレスラー、ザックを追う施設の看護師エレノアなど、皆が温かな労りと愛情に満たされていく。「友達は自分で選ぶことのできる家族」だと、施設の老人が言ったとおり、そこには押しつけではない思いやりがある。障害者を憐れむ安易な同情がこの映画にはない。それゆえ渾身の力でヒール役の巨体を投げ飛ばすザックに拍手を送りたくなるのだ。タイラーを演じるシャイア・ラブーフの繊細な演技と、アメリカ東南部の広大な眺め、現実から隔離された「どこか」を思わせる景色を切り取ったカメラワークにも注目したい。本作のオマージュといえる『ハックルベリー・フィンの冒険』の一読もお勧めする。

(松尾 祐美子)



◆◆ ファンタスティック・ビースト「ダンブルドアの秘密」(原題 Fantastic Beasts: The Secrets of Dumbledore) 2022年 ◆◆

この映画は、「ファンタスティック・ビースト」シリーズの第3弾で、略称は、「ファンタビ3」で、「ハリー・ポッター」シリーズの前日譚となっている。主人公は、ハリーと同じ、 hogwarts魔法学校を出た魔法動物学者のニュートで、可愛い架空の動物たちもこの映画の魅力の一つ。「ハリー・ポッター」シリーズに登場する、

ダンブルドア校長の若かりし頃の話ということで、繋がっている。彼は、主人公ニュートの恩師でもあり、ニュートを含む6人の仲間を結成し、宿敵グリンデンバルトと熾烈な戦いを展開する。アメリカ、ドイツやブータンなど、世界を股にかけて物語が展開するので、スケールが大きく、CG が創造する魔法の世界は、神秘的で、遊び心が満載である。特に、魔法動物の「麒麟」は、聖なる動物で、本物の指導者をかぎわけ、その者に跪くとされているが、それがなんとも愛らしい。原作者のJ・K・ローリングの、幻想的、かつコミカルな要素をふんだんに取り入れていながらも、仲間・信頼・決意を軸に6人が結束しながら、敵と戦い、壮大なスケールの謎を紐解いていく冒険譚は、子供のみならず、大人も大いに興奮させてくれる作品となっている。(村田 希巳子)

◆◆ トップガン マーヴェリック
(原題: Top Gun: Maverick) 2022年 ◆◆

今年公開の映画で私が劇場で観た唯一の映画がこのTop Gun: Maverick。公開の時期が5月27日と日本でのコロナ禍が少し落ち着いてきた時期でもあり、劇場に足を運んだ方も多かったのではないのでしょうか。

この映画は1986年公開の トムクルーズ主演“Top Gun”のなんと36年ぶりの続編ですが、この映画単独でも十分に楽しめる作品でした。

見所はなんと言っても若き Top Guns 対 指導者としての“伝説の Top Gun” マーヴェリック、そして最新鋭の戦闘機対36年前の旧式の戦闘機の対比でしょう。VFXを駆使しての戦闘シーンは圧巻としか言いようがありません。

英語は軍関係専門用語もありますが、比較的わかりやすいと思います。この映画ではアメリカ文化として

の軍事事情、特に海軍力と戦闘機という見方をするとさらに興味深く鑑賞できるでしょう。

また前作をリアルに鑑賞した世代(私も)には、主人公マーヴェリックおよびその周辺人物が同様に年を重ねて、なんとも懐かしい気持ちにさせられる映画となっています。

劇場での鑑賞をお勧めしたいのですが、コロナ禍でもあり、「Stay Home 映画鑑賞のススメ」としては前作も含めて2作品続けて鑑賞をしていただくと30年以上前の世の中と現在をいろいろな面から比較しながら楽しめる映画間違いなしです!! (福田 浩子)

入会案内

ATEM九州支部では新規会員を随時募集しています。会員登録はホームページから受け付けています。

ご不明な点は支部事務局(E-mail)までお気軽にお問い合わせください。

Website : <http://atem.org/kyushu/>

E-mail : k_office@atem.org

Twitter : <https://twitter.com/9atem>



編集後記

今年もコロナ禍の中、Webでの支部大会・全国大会の開催となりました。早く以前のように対面に戻って、学会後の懇親会が出来るようになることを祈っています(H.F.)